

ウラジオストク・ハルビンに向かうまでの二葉亭四迷

Futabatei Shimei : His Personal History before Heading toward Vladivostok and Harbin

角谷 淳
KADOTANI, Kiyoshi

[要約]

本稿では、旧外国語学校にいた二葉亭と官報狂時代の彼とウラジオストクおよびハルビンに出発するまでの二葉亭の姿を特に空間および時間に注目しながら読み解いていき新しい評伝を作することを目的とする。特に、外国語学校での二葉亭と、その他を比較するまたいかにして徳永商店の嘱託として、ウラジオストク及びハルビンに向かえるようになったかや、官報局時代の副業にも目を配った評伝にしたい。

キーワード

旧外語、太田黒重五郎、ニコライ・グレー、官報局、徳永商店、坪内逍遙、下層階級

[Abstract]

This paper, aims at creating a new critical biography of Futabatei Shimei, by analyzing his life between his former foreign language school days (Meiji 17-22) and Official Newspaper reporter days (Meiji 22-35) before he departed to Vladivostok and Harbin, especially focusing on the concept of space and time. It compares his worldview as a student with his ideas at later times; taking into consideration the time he spent at Official Newspaper Bureau in Japan and the period he was in Russia as the advisor of Tokunaga Trade Company.

Keywords:

old foreign language school, Juugorou Otaguro, Nicolay Gree, Official gazette, Tokunaga Shoten, Tubouchi Shouyou, Lower Class

はじめに

明治の作家で言文一致体の創始者ともいわれる二葉亭四迷彼と文学以外にロシアの関係も特に触れる必要があるのだが、本稿では徳永商店顧問としてウラジオストクに行くまでの空間・時間を中心として考えたい。

即ち

- ・ 外語学校での空間
- ・ 官報局時代初めての結婚の周辺の空間

・ウラジオストクに行くまでに空間
の三つである

二葉亭四迷は、露西亜の脅威を防ぐために相手を知らなくてはならないということで陸軍士官学校を受験するが強度の近視のためかことごとく不合格になり、次の年旧東京外国語学校露語科を受験している。

明治14年5月25日から明治19年2月4日までの4年半の間二葉亭は旧外語露語科に在籍していた3度に渡る陸軍士官学校受験に失敗した二葉亭がなぜロシア語を選択するに至ったのかを彼は次のように回想している。

「そこでとなぜ私が文学好きになぞになったかという問題だが、それは先ずロシア語を学んだいわれから話さねばならぬ。それはこうだ一何でも露国との間にかの樺太千島交換事件という奴が起こって、だいぶ世間がやかましくなってから後『内外交際新誌』なんてのでは、盛んに敵愾心を吹聴する。従って世間の世論は沸騰するという時代があった。すると、私がずっと子供の時分から持っていた思想の傾向一維新の志士肌ともいうべき傾向が頭をもたげだしてきて即ち懐柔愛国というような与論と私のそんな思想とがぶつかり合って、その結果将来日本の深憂大患となるのはロシアに極まっている。こいつ今の間にどうにか繁いで置かなきゃならんわいそれにはロシア語が一番に必要なだ。と、まあこんな考からして外語学校の露語科に入学することとなった。^(＊1)

1. 外語入学

樺太問題に全権として榎本武揚がペテルスブルグに赴いたのは明治7年のことであり市川文吉ら随行員とともに帰国したのは普土戦争などの事情から明治11年であった

また、『内外交際新誌』明治12年10月22日に創刊され発行所は、芝公園地6号の胞単社で、江口高廉・江口高進らを中心とするグループであった。^(＊2)

二葉亭の露国敵国とみなすほど激しい情熱を示すのは日清戦争前からであり、二葉亭が後に話したことは、多少割り引いて考える必要があり、少なくとも明治14年に明確な国際的展望を持っていたと考えるのは疑問である。少なくとも様々な情報を全体的な世界情勢のダイナミズムによってとらえることを身につけた官報局時代以前の二葉亭は、まだ明確な政治感覚を身につけていなかったとかがえるは方が無理がないだろう。

二葉亭がロシア語選択に当たってどのような考えを持っていたか、という疑問を解くためには入学の条件等の概略を知る必要がある。

明治5年東京に進出したニコライは副島種臣から、外国語学校の教師にならないかと声をかけられたが、宣教の方に専念するつもりであったニコライはその勧めを断っている。同年に政府関係者のみで、214人のお雇い外国人教師が招かれている。日清戦争までにロシア語を学べる学校及び施設はニコライと旧外語と北海道の露清語学校ができていたが、一時的な中野二郎天門の露清語学校は長続きしなかったため一時解体された外語学校とニコライ教会がロシア語を普及する中心となった。二葉亭が入学する時期の旧外語の校長は

内村良蔵であった^(※3)

2. 外語内部での二葉亭

当時英仏独三か国語は自費で露清韓の三か国語は官費が支給され後者の場合寄宿舍制を取りロシア語科の定員は25名受験の競争率は5倍であったが、この第一次試験では40名をパスさせその後約一か月の実習過程で定員まで人数を削減する方法が採用された。給費額は1か月5円書籍類は学校から貸与され、寄宿舍は1室に八人筒で全部で10室寝台は4人づつのものであった。

最終的な段階での二葉亭の成績は25名中10番前後であったという。しかしその後の二葉亭の精進の結果少なくとも二葉亭が分からない問題はみんなが分からないという風にロシア語の権威となっていた。

だが、二葉亭が特に官費生として就学する必要に当時迫られていた様子はない。実際に重要なことは、むしろ西源四郎と二葉亭との間でいかなる会話がなされ軍人志望の夢が破れた二葉亭が第二の道を歩むに至ってどのような形で外交官しかもロシア公使などという夢を形成したかであろう。」それが、その後の文学志望さらに官報局へと変質しつつ、ロシア特派員となる形で辛うじてロシア私設公使的な立場へとたどり着いた結果から言えば友人西源四郎と二葉亭の間に目に見えない葛藤があったのは明らかである。二葉亭の師古川常一郎や伊藤博文と姻戚関係を持ち、外交官エリートコースをたどった西と二葉亭の関係には未知の面も残されているが二葉亭の追悼文に示された西のあまりに簡単な内容を見ると、この二人の関係に未知の要素が多少ならず存在したと考えたくなる。といっても別に敵対するほど友情が悪化した、と考えるわけではなく、寧ろ、知られていないが二葉亭にとって有益な見分を持っていたのではないか？というほどの意味に過ぎない。

だとすれば疑問符が付いたまま二葉亭自身のロシア語選択の動機にかかわる発言を受け入れておくべきだろう。

二葉亭とともに合格した24人についてはここでは詳しくは触れない。しかし、二葉亭研究の核になる人物を何人か挙げると太田黒重五郎・中沢房則・川上俊彦・杉野嶂太郎・山下芳太郎…といった人々の当時の記録というのではないであろうからだ。いずれにせよ後に社会的にある程度の地位についた人もありその方面からも何か知りうることもあるかもしれないが、望み薄である。

当時旧外語は、神田一橋近くにあった二葉亭はその寄宿舍の一室にいたのである。川島浪速は、古武士の面影を持つ奥野広記らとゴスポジン長谷川二葉亭（二葉亭四迷）の記憶を語っているが、二葉亭と寝台を共にしたのは島田頼二・藤村義苗・太田黒重五郎である文部省直轄の旧外語で二葉亭らが受験した際学校側で採用するに際して二つの基準を設けた。

即ち一は年長者を選び一は年少者を選びました。年長者をよろこびました理由は、単に語学ばかりできてもしょうがない、自分一個のしっかりした意思見識を持って露西亜そのものを見なくてはだめだ、それにはやや齢の進んだ者の方が適当だと思いますので、一は単に語学そのものを主としました方で語学を完全に発展させるには比較的年少者の方がいいというのであったのでしょー一長谷川君は年長者の側でわたしなどは年少者の部類に属していました。^(※4)

この年長組には島田頼二・藤村義苗が含まれていた、つまり二葉亭ともに一つの寝台を用いた者たちは主に年長組であった。

さて、後の関連から露語科について触れておく方が便宜的に都合良いだろう。川島浪速は外語の露語科に入るための詳細を自伝では省略しているが、この当時やはり寄宿舍一足先に西源四郎が露語科にいなかったとすると、川島達露語科の人々が二葉亭に注目する事情は少し説明しにくい。二葉亭は当時それほど目立った人ではなかった。また、川島浪速もどちらかという癖のある人で、中国語を学んでいたが英語など俺には不必要だと言って、ある意味で問題児的存在で鬱屈した青春をもてあます若者の一人であった。この露語科には副島種臣・榎本武揚が組織した「興亜会」の生徒が、経営難のために送り込まれていた。

もともと外語は外交官向けの人員育成機関であって、主に外交官・通訳あるいは政府の必要とする「近代的知識」の研究員を養成する機関で官費を支給する科目は私学にも設備のない部門であったから、後にその人員の増加を抑制するための措置が森有礼が文部大臣の時代にとられたが、きわめて特殊な学問必要人員は、実際に養成した人員を大幅に下回っていたことは国際政治における清韓露三か国語の必要性を考慮するとわかる。

さて、二葉亭が露語の権威とまでに精進した様子はどのようなものであっただろう？友人たちの回想から、学生時代の面影を拾い集めてみよう。

長谷川君は非常な勉強家であった。その勉強というのも世間一般の青年輩のやっている義務的のそれではなく、全く自分から進んで一身を打ち込んだ勉強であった。

よく夜更けて人の寝静まるのを待って自身の好きな書物を心静かに耽読するというふうで、一冊の書を初めから終わりまで読み通さねば承知しなかった。昨今の学生の状態では、一冊の初めの方を一寸開いて見たままで置いたり、または途中までで止すか、中ほどのところで自分の気に入ったところだけを拾い読みによむのが多い様だが氏は断然そんなことをしなかった。それでいてよく遊ぶことも遊んだ。散歩運動雑談いずれも好きで、人並にやっぴいながら、人が静まる時になると枕元に小さな豆ランプを点して専心読書にふけるというのが氏の習慣であった。^(＊5)

二葉亭研究における藤村義苗の回想の重要性はむしろ中江兆民の仏学塾にかかわる「盛んに仏蘭西流の自由民権論等を唱導していた」という点にある。二葉亭研究家がもっと確かなデータを提供する準備があるものかわからない。筆者自身はこのわずかな証言に基づいて二葉亭論を一応組み立てているが、識者がさらに多くの資料を公表することを望むものである。

夜中に舎監に豆ランプの点灯をとがめられたり、たばこの吸い殻の散乱する寝床の枕もとで「汚い懐中持ちの煙草入れとナタマメ煙管」をいつも手元から放さず、読書に紫色のたばこの煙が二葉亭の周囲に濛々と立ち込めていた。深夜藤村はキセルをコツコツと叩く音で度々目が覚めることがあった。

何振りかまわぬ構わぬ蜜から風でずいぶんひどい風体をしていたという。が、肩のところにふところ手をあてて、肩を怒らせた当時の学生の気風には多分に侍の気質が残ってい

たようだ。

では、夜遅くにまで及ぶ彼の読書がどのような範囲でなされたのか、というと、ここに後年二葉亭と呼ぶ特質のある一個人の原型を何うに足る興味深い証言に出会うのであるベリンスキー全集を読破し、露語辞典をすべて描写した—当時なしうるに至ったのは二葉亭ただ一人—と藤村は言っている。二葉亭はさらに太田黒重五郎によれば次のような勉強をしていた。

「もちろん学校時代に主に政治史外交史で、政治上外交上の問題を盛んに論じていた。経済書も好きだったが長谷川君は、何に由らず書物に吞まれることはなかった。学校の教科書の経済書なんぞ勉強していたが—」^(＊5)

それだけではとどまらなかった。

それから氏は自分の本職のほかいつも故田口博士主筆の東京経済雑誌其の他内外の経済雑誌を読んでおられ他日の用に供しようと期しておられたようです。^(＊6)

二葉亭の読書範囲はそれほど視野の狭いものではなかった。

「氏には漢学の素養が深かったとみえその頃から我等仲間における一流の文章家であった。むつかしい支那の書物や詩歌等を集めて、気に入ったものは常に吟誦していた。又時々八犬伝や京伝ものの為永流の本杯貸本屋に借りて愛読していた。其の頃は、堂々たる官立学校の門を貸本屋が例のの高い風呂敷包みを背負って、いかがわしい人情本杯敢えて咎めなかったのだから、ずいぶん驚くべしである。長谷川君は斯く素養はあり、勉強家ではあるし入学後の成績からはいつも首席であって私の知れる限りにおいては、二番以下に降ったことはなかったと思う。」^(＊7)

3. 二葉亭の日常（ニコライ・グレーの翻訳との出会い）

肩ひじ張った勉強の合間に二葉亭は適当に息抜きもした。特に寄席が好きで、当時人気のあった鶴賀若辰という新内を好んでいた。矢崎嵯峨の屋は「ランプ消したる隙間の風は出雲で取り持つ神の業」という、二葉亭がよくまねした新内の文句を書き留めているし、内田魯庵は「処、青山百人町の鈴木主水というお侍さんは…」と手拭いを姉様かぶりにしてかくし芸を演じた後年の二葉亭について語っているから、二葉亭の俗曲趣味は相当深いものがあつたのだろう。

さて、二葉亭がロシア語を学んだ教授陣は市川文吉・古川常一郎・ニコライ・グレーというロシア語の教師に3人の助教陣が中心となった。

このニコライ・グレーによるロシア語の感化は、大変二葉亭にとって影響力の強いものであったという。二葉亭自身「予の愛読書」で次のように語っている、日本語の文章が、だらだらと牛のよだれのように変化に乏しく抑揚にかけると感じるようになった要因を学生時代に求める。「然るに欧文—欧文は全体そうだが殊にガンチャロフの文章等になると、黙読よりも音読した方が面白い（上手に読みさえすれば音読の方が面白い）それは自

分の考えのみではなかった。というのは、嘗て学生時代に教場で教師が、ガンチャロフを読んでくれたことがあった。本はただ一冊しかなかったので我々生徒は本なしで読むのを聞いている。その教師は実に読むのが上手な人であったが面白くて堪らぬ。あんまり面白かったから、その本をかりて帰って面白い一節一節を黙読してみた、ところがもうノヴェルティーがなくなった為かも知れぬが教師が読んだ時ほど興味がなかった。」

ニコライグレーの朗読は、それほど巧みであったのであろう。太田黒重五郎は、その教授法について次のように書いている。

当時の語学校というものは、今日のように語学ばかりを教えたものでなく、高等普通学を原書で教えていたから、級が進むにつれて、後には文学書ばかり読むようになった。あんなふうな教え方をしていた学校は他にはなかったでしょうが、その頃の露語科の教科書として用いたのは、有名な文学書だ。ところが有名な文学書は一冊しかないので、グレーという教師がそれを読んで聞かせて学生は手ぶらで聞いているのだ此グレーという人は朗読が頗る名人で調子も面白い節も面白い。真に妙を極めたものだ誰でも聞き惚れないものはない、自ずと文学への感興がわいてくる。で、読み終わるとハラスランスチカ即ち性格批評作中の主人公または女主人公の批評をやらせて之で文章の練習をさせた毎日これを行なったもんです最初の中は露西亜文学のセレクションから始めて、追々と各大家の名作に及んだもので、レルモントフ、ツルゲーネフ、ゴーゴリ、カラムジン、カラゴゾフなどで、トルストイの『戦争と平和』等も読みました。^(＊8)

この性格批評がどのようなものであったのか当時の回想の中からは、読み取ることはできそうにない。

だが、明治14年坪内逍遙が、ホートン教授のシェークスピアの試験に失敗した事情に想起すれば「ハムレットの王妃ガートルードのキャラクターを解剖せよ」という問題に対して、坪内が道義批評したということの意味、そしてグレーのパラクタンスチカとホートン教授の性格解剖がどのような共通性と相違性を持っていたか、近代リアリズム文学の温床は、きわめて単純な見方からすれば、この性格批評という方法にあったし、他方二葉亭は、グレーの見事な朗読に対して義太夫の名人を思い浮かべている。

「毎日毎日読んだのだからずいぶんたくさん量で、小説もあれば脚本もあり、コミック物トラジックの物種種雑多な物があつた。上の級になってからは、語学の力も大分付いてきたし鑑賞力も次第に増して来たし、朗読上手の先生が世界の名著を面白く読んで聞かせるんだから学生達も日本の小説同様に一心に聞いている。

グレーの朗読するロシアの名作を日本の小説同様に聞くことができたという。この優れたロシア語教師が稀な才能を持っていたことは疑いない。この教師の下で学んだものの中から、翻訳や文学に手を染めたものが数人いる。しかし、市川文吉、古川常一郎の役割は従来二葉亭研究家の間でも、回想の中でもあまり触れられていない。だが、後に市川・古川・長谷川の露語三川として並び称されたこの三人の間にあるつながりはかなり深かったのではないか。大庭慶秋は、次のように述べている。

硬直なる古川先生は貧乏死に死なれた。市川先生は飯田町におられたが多分未だ存命であろう。古川先生の細君は西源四郎氏の姉さんで、西氏と長谷川君とは語学学校時代の莫逆である。かかる関係からでもあろうが旧師古川先生の多くの遺族の世話を懇切にされたのは多くの門弟中唯一人長谷川君あるのみであった。^(＊9)

大隈重信の書生として育った古川丈一郎は明治34年1月28日、牛込薬王寺前町の家で死去した。その後戸主となった定吉に明治42年まで二葉亭は年賀状を出していた。当時10歳の定吉が形だけは戸主となっていたとはいえ、遺族とどのようにかかわったかは、中村光夫が奥野広記に対して、二葉亭、杉野峰太郎山下芳太郎などの示した友情のように表面に現れてこない。従って、この露語三川おそらく共有していたにたに違いな厄介な性格を語るだけにとどまるが、市川文吉も古川常一郎も、教師であったから何かしら感化したに違いな「余が露語の友は世に怪しき人のみ多し。」^(＊10)

やがて廃校となってしまう旧外語でのいくつかのエピソードを伝えよう。

当時官費として支給された月額5円の金は賄料などを差し引くと、結局小遣いは一円と残らず、たいていは家からいくらか仕送りをしてもらうのが普通で、それも大して余裕のない家庭のものが多く、父吉数（岩藏）が官吏だった二葉亭はこの中でも金回りのよいほうであった。大体学生たちの金の使い道は飲食で、金回りの良いときは牛肉屋悪い時でも布団を質に入れてさけをぶらさげて、そこらを遊ぶというものであったんだろう。

「(ママ) ある土曜日のことであったが、これから飛鳥山に散歩しようという動議が出て、さっそく出かけようが金がないという騒ぎ、そこで長谷川君（二葉亭）は自家（ウチ＝ママ＝）へ走って50銭ほど貰って来たから4人ほどで、生き良い良く押し出した。そして十分に遊び暮らして帰途についた。」^(＊11)

ところが、寄宿舎の規則で、午後7時を過ぎて帰ったものには、食事を出さない決まりになっていたが、その時その時間に遅れた4人（太田黒重五郎らか）は全部金をはたいても1銭4厘しかなく半日歩いた空腹を焼き芋でふさいだという。

二葉亭は酒が好きで、ビール瓶に酒を詰めて散歩することが多くある時は梅見に行行って酔って眠り込んでしまい、数人が眠りながら歩く二葉亭をはらはらしながら見守り担いで帰ることもあった。

二葉亭はガリ勉型の才子ではなかった。

口ベタで近眼で人をにらみつけるような、二葉亭の癖のある性格が発揮されるような事件もあった。

仲間が集まって持ち寄りの金を出し合って食糧を買おう、誰が買いに行くか という段になった 割になった者がどうしてもかいにいなかった。その時、二葉亭は怒って、決闘を挑んだのであるが、普段から真顔で冗談を言うふたばていのこととて、初めは仲間も本気にしてはいなかった。ところが傍観していた者も次第に様子が唯ならないので急いで

止めに入って、そのふたりの間は問題なく済んだがその両者は顔を合わせても口をきかずという絶交状態が続いた。

こうした角のある性格は、寄宿舎時代を通じて後、家に戻り通学するようになって、両親を困らせるほど昂じていったのである。

明治15年以来学業に優秀な成績を収めた二葉亭は明治18年には、3月1日付で自今5ヶ月の間給付額1円増の報償給付生となったが、良いことばかりは続かず福島県三等属となって、福島に租税課勤務していた父吉数（通称岩蔵）同年4月4日非職となり5月に帰郷するという事態が生じ、二葉亭は、神田猿樂町9番地に両親とともに暮らすことになった。

4. 外語廃校

更に、7月17日5年に進級した、時の文部大臣森有礼の政策改変で9月22日外語学校が廃校となり翌年1月19日露清鮮語学科は東京商業学校附属語学部翌年1月19日家計不如意のため退学するという形で、廃校に対する不満から、飛び出してしまったわけである。

この間の事情は、武力振興へと政策が向けられ、教育部門に実業熱を興そうとする森有礼の英断があったのだろう。

「(前略) 僅かに附属部語学部という名称の下に厄介視させられて、其授業をつづけて居たが、其頃商業学校の生徒というものは、大抵商業家の若旦那で、人物も大人(おとな)しく、風采も前たれ掛けで通学するという風であったから(中略) 衣は肝に至り袖腕に至る学校的生徒とは、その気風もその態度も到底一致せぬいわば、その気風もその態度も到底相一致せぬ、謂わば同じ器に水と油を持ったようなものであって(後略)」(*12)

森有礼の処置は英断というより暴挙というのが生徒側の反応であってしかも2月には消滅し、半年で卒業するところを4年半の修業証明書を卒業証書の代わりに交付する形で完全に廃校となった。

時の商業学校長矢野二郎は、そのまま商業を学ぼう措置を講じ有能な語学生の将来を心配して、さまざまに説得を続けたようである。近代的商業発展のためのリーダーシップをとりうる人材を育成しようとするこの政策は、しかしうまく機能せず残留組と棄校組に分裂した。先ほども触れたが二葉亭は棄校組の一人であった。この時、後に北京で協働する川島浪速も退校したのであった。

後に親しく二葉亭と交わった内田魯庵は、当時矢野二郎と二葉亭との間で取り交わされた交渉の事情の片鱗をうかがわせているが

当時の商業学校の校長矢野二郎は二葉亭の才能を惜しんで度々校長室に招いて慰諭し、愈々学校を退学してからも身分上の心配をしてやろうとまで好意をもってくれたが不平で学校を飛び出しながら、校長の恩に頼るような所為は、餓死しても二葉亭にはできなかった。(中略) それまで潜在していた文学的興味・芸術的意識が徐々にあたまをもたげてきて当初の外交官熱が次第に冷め其の時分はもはや以前の東洋策士気質矢野の厚意に曾って官界なり実業界なりに飛び込む気にはなれなかつ

た。^(＊13)

この世話好き矢野二郎は、どちらかという親分肌の一から十まで干渉好きで、一癖も二癖もある二葉亭には素直にその世話を受けるになれないところがあり、意地ずくになっていた二葉亭は利害も是非もなく相手の厚意をはねつけてしまっていた。考えてそうしたわけではない。

満蒙行き前後の二葉亭の『絡業婦』『実業論』は片手に剣という近代植民地主義の軍備を背景とするものではあったが、やはり「算碁」を必要とする国際的舞台での夢で明治30年代の二葉亭は、もしあの時矢野校長の厚意を受けていればそれを契機にもっと確固とした実行力が身につく、現実性のある明確なヴィジョンを持つ実業家になれたかもしれない。

だが、外交官志望が文学志望に変わり、更に実業へ、ジャーナリストへあるいは革命家と絶えず変転する二葉亭の野心は二流の人でなく一流の人へいかなる職業であれ成功することを心がけるが、ただ一つの道を石にかじりついてもやり抜くことのできない弱さを持っていた。

成程魯庵は、文学熱を旧外語在学中に存在したと思っているようであるが、それは後からいう事で、必ずしも二葉亭が芸術への関心を早くから持ったと仮定することは適切ではないと思うのである。柳田泉は実に巧みに二葉亭論を展開するにあたって分かりやすく語るには、彼が初めから文学を志望して苦闘した文豪として説くよりも、ついでにやったものが図らずも常に先駆的な役割を果たした経世家としてとらえる方がよいだろうというが、実際言文一致、エスペラント皆二葉亭が望むことと少しずつずれているのである。

この矢野二郎厚意をはねつけた二葉亭はただ若者の血気「丁稚学校」への反撥矢野二郎への嫌悪感、暗い情熱に駆られていたのであった。

だが、矢野は1月に退学した二葉亭にも証明書を交付した。需要の少ない語学を修学した者たちの前途には苦闘が待っていた。その将来に対して矢野ができるのはそのくらいのことであったのである。

ここまでは青年期の二葉亭（旧外語学校時代を中心に）まとめたが、あえて言文一致に関係したことなどを飛ばして朝日新聞囑託としてペテルブルグに渡るまでを中心に触れていきたいと思う。

まず、簡単に二葉亭のその後について触れていきたい。

両親を安心させるためには、まず就職をしなければならない。しかし、さて、そういう段になっても人に自分を売り込むということのできない二葉亭は、就職口もなく一人できゅうきゅうとしていた。その苦境を見るに見かねて、もし仕官の希望があるならば、と言って片肌脱いでくれたのが、外語学校の恩師古川常一郎であった、彼は要職に就くことも可能だったのにも関わらず官報局にいた。彼の斡旋により、二葉亭は官報局の翻訳官として就職（月給30円）することができた。

5. 官報局時代

官報局は当時局長は高橋健三で、以下表玄関の受付にさえ明治の初年に海外旅行免状を2番目に受け取りロシア横断をしてきた人物が控えているといった具合に、世の気風に染

まぬ、各界の一匹狼的な気骨のある人物をそろえ、しかも彼らは、局内においてさえその地位を離れて一介の書生のように振る舞うというおよそ官庁らしからぬ雰囲気であった。

局長といい課長といい属官というのは職員録の紙の上の空名であって（中略）高談放論珍説議論を聞わずに日も足らずであった。^(＊14)

と言われている。官吏嫌いの二葉亭もこの自由な空気には大いに満足し局長である高橋とさえ、対等に人生問題を論じたりした。

二葉亭の官報局内における仕事は、はじめ英字新聞の翻訳、後にはロシア語の新聞雑誌の翻訳・紹介であったが、古川常一郎ら先輩に伍し部内でも重んじられるようになった。だが勤務ぶりは決して精勤というのではなく、雨が降れば出ず、風が吹けば出ず、その出勤する日も決められた時間が8時というのに9時半か10時ごろのそのそ出てきて「おいおい給仕お茶をくれだがベンションは厭だよ」といいゆっくりお茶を飲みそれから仕事に取り掛かる、という風であったベンションとは小便を逆に呼んだので、つまり薄いぬるい茶ではなく濃い熱い茶をくれといったのである。

やはりこのころのことであるが、二葉亭はそばが大好きで、昼飯にはいつも神田美土代町の柳屋という蕎麦屋から夏はざる蕎麦冬はてんぷら蕎麦というように取り寄せていた朝のうちに給仕が注文を取りに来ると、二葉亭は来ていない、遅刻してくるものと気を利かせて注文しておく欠勤されて、結局給仕が二人前を背負い込むようなことが度々であった。

そういう二葉亭の勤務ぶりに誰かから文句を言われるということもなく、結構上の人にはかわいがられ下の人には親しまれたので彼にとってはかなりいごちのいいといえよう。

定職を得て時間的にも余裕ができた二葉亭は、飢えたように本を読み漁った。彼がジャンルとして主に選んだのは、欧米の哲学や心理の本である。殊にダーウィンやスペンサーの進化論に興味を持ちやがてやがて感化院などに関心を寄せた。

しかも、単に本を読むだけでなく、彼自身感化院を始めて、非行少年や罪人を矯正しようという計画を立て、そのことを友人に語っている。

彼の感化教育説を要約すると、

善人悪人というのは精神の健康不健康のことであって、罪人は一種の病人である。従来のように感化院が、科学の素養のない道学者によって経営され懲罰やけいばつによって矯正しようとしても治りはしない。まず特殊精神病院を建設して、そこに非行少年や罪人を収容し最新科学を応用して、彼らの精神状態を調べ、根本の病院を見極めてこれを治療すべきである。^(＊15)

というものである

明治初期はヨーロッパの科学というメスが、さまざまな分野に入れられ、非合理性が改革されつつあったのであるが二葉亭は、それを感化事業に実行しようとしたと考えられる。しかしそのうち、例えば単に懲罰を加えるだけではなく、その要因を見極めてから治

す方法を講じなければならないというような部分的には見るべき点はあるとしても罪人をすべて精神病する根本において空想的であることは否めない。

そこには感化事業とヨーロッパ科学思想とのかなり無理なこじつけがあり、我々には何よりも、その裏に存在する二葉亭の、何か国家的大事に自分の能力を役立てたいという強い思いが感じられる。

もちろんこの計画は実行されなかった。そういう思いつきを面白いと思う人はいても実際に曾の授業に加わって金を出してくれる人はいなかったのである。

二葉亭はこのころ「平民研究」なるものもやっており下層社会に出入りした二葉亭はこれを「人生研究」とした。

下層社会に対する興味はドブロリューホフら革命家の文芸思潮を早くから熟読していたことから来ているのだろうしそもそも19世紀のロシア文学の古典を読むに際して社会主義や階級差別の問題は、それらに対してどのような立場を取ろうとも避けることができないものだった。また、上にも少し触れたがロンブローゾらの犯罪学への関心にも結び付いていった。

二葉亭の平民研究は、松原岩五郎・木尚江・松原源之助らに大きな影響を与えた、と言われている。

こうした青年たちの中でも特に横山は二葉亭と親しく交際しともに底辺の人々の研究を進めることになる。

内田魯庵らが、二葉亭のこの奇妙なフィールドワークについて証言を残している。

学者の畑水練何の役にも立たぬからと、実際に人事の紛糾に¹¹触れて人生を味わうとし、この好奇心に駆られて度々社会の暗黒面に出入りした（中略）－例えば洋服の上に羽織を引っかけて、肩から瓢箪を掲げるといような変な扮装をして、田舎の達磨茶屋を遊びまわったり、印半纏に弥蔵を決め込んで職人の仲間に入ってみたりした。（中略）殊にその頃は好んで下層社会に出入りし、旅行をするときも立派な旅館よりは、商人宿や達磨茶屋に泊まったり東京にいても居酒屋や屋台店に飛び込んで八さん熊さんと並んで盃のやり取りをしたりして、人間の美しい天真はお化粧をして綾羅に包まれている高等社会には決して現れないで下層者に真のヒューマニティーを感じることができるといっていた。^{（*16）}

達磨は密隠売婦の一関東三陸などで使われていた隠語だが、そのような女性たちと二葉亭は茶屋遊びにふけていたのである。

このころの文学者たちは下層階級を好んだのか墨東奇談などを見ると田山花袋も自分の立場を低く見せて例えば遊郭でも上流階級の使う吉原ではなく庶民御用達の玉の井に行くなど下層階級の生活に興味があったようである。（永井荷風と下層社会の例は枚挙にいとまがない）

ここで二葉亭の下層階級への関心がどんなものだったのか太田黒重五郎の例を引いてみよう。

裏長屋の2階から洋服姿で官報局へ出勤していたことがある。こんな話がある。

どこだか知らぬがごくごく下等の地獄屋へ60許りの引っ張り婆さんに連れ込まれた。路次（ママ）の裏の裏の奥へ突き当たった汚い狭苦しい家で、枕もとに薄暗いカンテラがちらちらしている板のような臭いせんべい布団の上に坐らされてぼんやりしている。婆さんは相手の女を探しに出ていった。暫らくすると一人で戻ってきて『まことにおあいにく様ですが若いのが出払っております私ではお気に召しますまいか』というご挨拶。『之がライフだよ』という当時の長谷川君の話だった。（*17）

6. 最初の結婚

こうして、二葉亭は悪所遊びに抵抗感を全く持っていなかったどころか「ライフ」の研究」という意味で大いに関心を持っていたようである。坪内逍遙の証言によると、二葉亭は官報局に勤務を始めた明治22年（1889）までは女性経験がなかったという「廿六歳とは思われない魁偉な体格の彼ではあったが廿二年度までは確かに童貞を守っていたほどの品行方正、誠実でもあり公明でもあり強直でもありそして識見が高尚で思慮が慎重であった。」これを裏付けするように自伝的要素の強い小説『平凡』では、学生時代の主人公が「私の友人は大抵皆然うであったから皆このころからボツボツと所謂「遊び」を始めた。私も若し学資に余裕があったらやはり『遊』んだかもしれん。ただ学費に余裕がなかったのと神経質で思い切った乱暴ができなかったのとで遊びたくとも遊びえなかった。当時彼は、一人の女に出会った。名前を福井つねといい、彼とは正反対に非常に快活で、鼻歌で世の中を渡っているような女だった。大口を開いてアハハと笑うような態度に上流社会の上品ぶって何も言えないようなつまらなさに比べて生地のままに生きる生命力が感じられて二葉亭はひかれた。

あながちほれたというわけでもない、が、なんだか自分に欠乏している生命の泉というものが、彼女には沸々と湧いている様な感じがする。そこはまア自然かもしれないね一日陰の冷たい、死というものにつかまれそうになっている人間が日向の明るい生氣ハッタツたる陽気なところを求めて得られんで煩悶している。すると、議論じゃ一向始末に負えない奴が浅墓（ママ） ちゃあるが、具体的に一寸眼前に現れてくる。

私の心というものは、その女に惹きつけられた。（*18）

もちろん両親はそういう女との結婚には猛反対であったが、かれは、その反対を押し切って結婚した。両親とは別居して中猿楽町に新居を構え、その後真砂町、飯田町、東片町と転々その間明治26年には長男同27年には長女が生まれている。

いざ結婚してみるとあれほど魅力を感じた女であったが、次第に化けの皮が剥げてきた。というより二葉亭の方で買いかぶりすぎていたのである。天真爛漫と思われたのも無知無自覚ゆえに他ならなかった。教養に隔たりがありすぎて、夫婦の話題も共通なものなかった。

しかも彼女にはそれまでの長い習慣で、さまざまな面でだらしなさがしみ込んでいた。常識では考えられないことであるが、例えば、彼女が、二葉亭の役所へ着ていく着物から

子供の着物まで全部質入れしてしまったので彼が金を工面して両親に気づかれないうちに受けだしに行くというようなことが毎月のように繰り返された。彼は何とかそれを矯正しようと試みたまるで手ごたえがなかった。いつも、いさかいが絶えなかったが、それも、彼が勝手に怒って悩むというような、独り相撲に終わることが多かった。

二葉亭は次第に根気負けしていく。一方彼のそういう説教はつねの気持ちを二葉亭から離れさせる結果となり、ついに男関係の不始末を招いて離婚を余儀なくされる。

「唯我の夫婦親子の情縁全うする能わず、果敢なきことになりたるを嘆息するのほかなく候」と二葉亭は明治31年3月坪内逍遙あての書簡に書いている。常と知り合って8年目のことである。

結果的に見れば破局の原因はすべて妻のつねにある、しかし二葉亭だけが、苦渋をのまされた被害者であったかといえ、決してそうとは言えない。つねも勝手に二葉亭に理想化されないものねだりをされた被害者ろいえよう。

しかし、ともかくこの一事によって、彼が下層社会というものに抱いた夢がみじめに壊されたのは事実であって、彼は後にこのころを回想して友人の内田魯庵に

「あの時代、無暗と下層社会が恋しかったのはやはり露国の小説に書かれていたからだ。(中略)露西亜は階級制度の嚴重な国だから立派な学問見識があっても下層に生まれたものは終生下層に沈淪しておらなければならない其結果が意外な根柢ある革命的扇動が下層社会に始まったり、美しいヒューマニティーが貧民の間に発現されたりする。露国の小説には此国の消息が屢々洩らされていて、下層社会のために気を吐いている。こうゆう小説に読みふけたもんだから自然下層社会に興味を持つようになったが、日本の下層社会は根本からだめだ。精神の欠乏が物質の不足以上だから、何を説いても空々寂々で少しも理解しない。倫理も哲学もあったもんじゃない。根柢からして腐敗しきって到底救う可からずだ。」^(＊19)

と語っている。

ここまでは、二葉亭がロシア文学の影響を受け下層社会に興味を持ち結婚までしてしまうという官報局時代のことに触れた。この後二葉亭は官報局を辞し実業界に入ったり様々なことをするのであるがその顛末を少し見てみよう。

二葉亭は生涯を通じて、理想を嫌悪する理想主義者文学を否定する文学者であったわけだが、こういう逆説的な姿勢をいつも強いられたのは、彼が理想や文学を余りに性急にめすぎその実現を即座に期待してそれに裏切られたからである。理想に裏切られずにいないほど、純潔で貪欲な理想化であることに彼の性格の根本があったので、この、「可愛さ余って憎さ百倍」の心理は、文学や社会主義など彼の青春を満たした対象に向かって同じように働いていた。

従って、この、思想家であることに終生甘んじなかった人生の思索者が、彼の青春とその内容を成した文学に対して、しばしば否定と嘲笑の口吻をもらす。しかしそれは彼の独特の考え方から来ているもので、たとえ「実感」であっても、彼の青春の実態を伝えるものではない。

彼の思想は、生活の局面（空間）につれて、様々に変化したがこれらの思想に対する二葉亭の性格は生涯一貫して変わらなかったのも、逍遙も、官報局に勤めて以来二葉亭の思想や言動がかなりかわったが、結局その変化は表面的なものにすぎなかった「彼はやっぱり彼で現実主義者ではあったが普通言う実際家などでなく理想家たりシオリストたる性癖尚昔の儘に残存していた。（中略）性格としてはどう著しく変わってもいなかった。」と言いつい「人間各自の気象ほど宿命的なものはない」と付加している。

しかし一方二葉亭の思想的興味の中心が、文学から、人生問題、社会問題の直接の探求それから国際問題という風に、次第に推移したことも事実でありそれにつれて彼の思想の色彩も青年期の人道主義から国家主義に社会主義から国権主義民族主義に変化したことも、事実である。

7. 露西亜行き

これらの主義は二葉亭の精神の内部で、相対立するよりむしろ互いに捕捉しあうもので、例えば彼の社会問題に対する興味は彼が文学で立とうとするいぜんからのものであり（ロシアの南下を防ぐために…云々）、文学を遺棄したのちも、人生問題と結びついて、彼の思索の中核を形造り、社会主義と社会主義者に対する同情は晩年まで衰えなかった。

露西亜の極東探検は17世紀から実施されていたが、ユーラシア大陸最東端まで達したロシア人達は良港を求めて南下をはじめ19世紀後半から現在の河川半島などが発見されていく。今日ウラジオストクと呼ばれている港湾は実は1855年に英国の感染によって発見されポートメイと名づけられた。それはこの時遠く黒海で闘われていたクリミア戦争と関係があり、極東露西亜にいた露西亜艦隊が英仏艦隊逃走したのを、英仏側が追跡・探索しそれがポートメイの発見につながったのである。クリミア戦争の終結に伴い同地域は再び露西亜の勢力圏にもどりポートメイは、1859年にウラジオストクと改名された。

こうして、ウラジオストクは良港を求める露西亜帝国の政治的拠点として出発したわけだが、やがて1904年に開通するシベリア鉄道の終点ともなり、極東露西亜において大きな経済的・軍事的な意味を持つようになる。

従って、地理的な近さもあって、日本からの移民は早くから盛んであった。当時は極東露西亜は日本に比べて経済的にかなり発展した地域であり、日本からは労働者が出稼ぎとして移り住んだのであるしかもその中のかなりの部分は娼婦（北のからゆきさん）であった。ウラジオストク在住の日本人は、かなりの部分売春に従事する女性であり、またウラジオストク全体でも、娼婦の多くは日本人1889年には、市内の売春宿は10件でそこで働く売春婦は合計104人そのうち20人が露西亜人残りの84人は日本人であったという。

ウラジオストクには大きな日本人の商社会社が二つあった。徳永商店と杉浦商店である。

「浦塩では、徳永龍吉氏が一番手広く商売をしている事は誰でも知っている杉浦氏の名は露国貿易業者の代表として日本にも能く知られている。ところで徳永商店は、杉浦商店と対抗して大いに雄飛戦闘する野心があつてどういう方面に長谷川君の力を煩わすツモリがあつたか知らぬが左に右く長谷川君を顧問という名義の下に佐波氏の仲介をもって招いた。」（*20）

徳永の思惑はともかく二葉亭にしてみれば、極東調査が第一の目的であり、そのための便宜が図られるのであれば、どのような資格でもよかったのだろう。二葉亭と徳永の仲介をしたのは、外国語学校の同窓桑原健藏によれば「沢という今統監府の通訳間をしている人が徳永商店へ出たのでその関係で徳永の店へ行ったそう。ウラジオストクハルビン行きが整ったのは明治34年（1901）暮れのことであった。

明治35年春二葉亭は高野りうと二度目の結婚をした（披露をしたのみで婚姻届出すのは帰国後次男の富継がうまれてからのこととなる。

二葉亭としては身を固めてロシアに行きたかったようだ

明治35年5月3日彼はハルビンへ向かって彼の家計を楽にしてやろうという友人たちの計らいで、彼は徳永商店顧問の他に日本貿易協会嘱託という肩書を持つことができた。

満州やロシアの商業事情を調査するのである彼はまずウラジオストクに上陸そこからハルビンへ向かった。

まとめ

以上が二葉亭が外遊するまでの三つの空間（外語学校・官報局・その他）である。このほかにも、二葉亭が坪内逍遙と会って、学士で書生持ちだった彼に逆に文学の「師」とされたり言文一致体を発明したりするのだが、その辺の事情は、この稿では触れない。ここでは、若いころの二葉亭を中心になぜロシア語を学ぶようになったか、外語学校での寮生活（一部自宅）外語を退学した後の官報局奥での生活を中心に述べた。特に外語学校での生活を中心に述べたが彼は、とくに、主任教授ニコライ・グレー（最初の主任教授は細菌学者メチニコフの兄弟のメチニコフ）の朗読に感化され彼のことを非常にほめていた（同僚太田黒重五郎も同じ）（これが本稿における第一の空間）そして彼は、文学者を目指し逍遙を訪ねたり露西亜行きを図ったりするわけである。しかし彼の思うようにはならず、管理が嫌いだったのにもかかわらず官報局に就職する、彼は最初は嫌がっていたが、雨が降っても欠勤、風が吹いても欠勤普段も遅刻という勤務状況でも特に怒られず仕事をし、先輩にかわいがられ荒廃にしたわけて居心地の良い職場生活をおくっている。蕎麦屋からの出前のエピソードなどは本文中に入れた。（これが本稿における第二の空間）そしてその他としたが、これが最も二葉亭の性格形成に関連していると思われる二葉亭の下層社会へのあこがれ、なぜ下層社会がそれほど気になったのかということもちろん露西亜文学とロシア情勢の中で下層社会が担った役割ということからの興味もあるが、自分は、上流社会にいてこのような社会に住んではない（これを言うと福井つねとの結婚はどう説明するのかといわれてしまうかもしれないが）自分は上流社会の人間なんだという自我から来ていると思われる。この三つの空間を考えると二葉亭がいかに変わったかというのが分かる。（それぞれの空間での身の処し方等）そしてそのような精神的変貌を見せながら、二葉亭は本文には載せなかったがスパイのような役割を持たされて徳永商店顧問としてハルビン・ウラジオストクに向かうのである。この旅は、外語に入った契機ともなったといわれている「露西亜の南下を防ぐためにまず相手の状況を知ることが必要（*21）」と一般的に言われているのと目標も合致し本人も相当強い責任感を持って満州・ウラジオストク旅行に行ったと思われる。

この稿には文芸の世界に生きた二葉亭四迷というのが意図的に全く触れられていない。

彼の作家の部分は例えば『新編浮雲』をどう解釈するかなどいろいろ興味を引く点がたくさんあるので、稿を改め検討したいと考えている。

- (＊1) 二葉亭四迷『予が半生の懺悔』
- (＊2) 二葉亭四迷ら編『内外交際新誌』
- (＊3) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 85
- (＊4) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 88
- (＊5) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 90
- (＊6) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 90
- (＊7) 藤村義苗のメモ
- (＊8) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 92
- (＊9) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 94
- (＊10) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 94
- (＊11) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 95
- (＊12) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 97
- (＊13) 亥能春人『二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998 P 98
- (＊14) 福田清人・小倉修三『二葉亭四迷人と作品』清水書院 1966 P 41
- (＊15) 福田清人・小倉修三『二葉亭四迷人と作品』清水書院 1966 P 42
- (＊16) ヨコタ村上孝之『二葉亭四迷』ミネルヴァ書房 2014 P 125
- (＊17) ヨコタ村上孝之『二葉亭四迷』ミネルヴァ書房 2014 P 126
- (＊18) 福田清人・小倉修三『二葉亭四迷人と作品』清水書院 1966 P 47
- (＊19) 福田清人・小倉修三『二葉亭四迷人と作品』清水書院 1966 P 48
- (＊20) 福田清人・小倉修三『二葉亭四迷人と作品』清水書院 1966 P 60
- (＊21) 福田清人・小倉修三『二葉亭四迷人と作品』清水書院 1966 P 14

主要参考文献

- 中村光夫『二葉亭四迷伝』講談社 1971
- 関川夏央『二葉亭四迷の明治46年』文芸春秋 1996
- 小田切秀雄『二葉亭四迷』岩波書店 1970
- 太田治子『星はらはらと二葉亭四迷の明治』中日新聞社 2016
- 亥能春人『続二葉亭四迷とその時代』宝文館出版 1998